

歴史を書くことと読むこと

安村 直己

阿部安成氏の論考「始源の歴史学を批評する—想起される横浜の過去について—」を読み終えた際、歴史を読むとともに書くことを職業としている者として看過することのできない重要な論点を提示しており、適任ではないことを自覚しつつもこれには何らかの応答を試みるべきであると考えた。あらかじめ結論めいたことを述べておくと、阿部氏の読みの深さには感服させられるところが少なくないが、その著者がなぜ書くことにこれほどこだわるのか、読むことを軽視されるのか、という疑念をもたざるをえない。その疑念をここでは、2月2日のシンポジウム当日よりは整理したかたちで提示することを試みる¹。その際、シンポジウムのもう一人の報告者ズデニェク・ホイダ氏の報告にも随時言及することにしたい。

私の疑念は大きくいって四点に集約される。以下、横浜の〈始源の歴史意識〉の連続性、

〈始源の歴史意識〉の主体をめぐる問題、横浜歴史の〈書法〉の汎用性、そして歴史を書くことと読むことの関係の順に見ていこう。

2節の末尾において阿部氏は、「市営の歴史史料館にとっては、かつて20世紀初頭に創成された〈始源の歴史意識〉>をささえる日本の開国＝横浜の開港という言述が自明のこととされている。その創生からもう100年がたとうとするいまも生命力を保つ横浜の始原をめぐる歴史意識があり…」と書いている。阿部氏の別の論考²について論じた梅森直之氏の整理によれば、阿部氏の提示する横浜歴史＝日本近現代史という図式（始源の歴史意識あるいは横浜歴史の書法と置き換えることもできよう）は、個人の歴史、記憶と国民国家の歴史というものを媒介する中間項として都市横浜の歴史があるという見解に基づいている³。この図式は本論考でも維持

必要に応じて言及するにとどめる。

²阿部安成「横浜歴史という履歴の書法—〈記念すること〉の歴史意識」阿部安成他編『記憶のかたち—コメモレイションの文化史』柏書房、1999年、第1章。

³梅森直之「歴史と記憶の間」前掲書、第4章、pp.180-181。ただし、梅森氏の整理が100パーセント本論考にあてはまるわけではない。本論考で阿部氏が展開されている図式は、前掲論文においてよりもさらに単純化されている。横浜をひとびとにとって生きられた場ととらえ、ひとびとはそこでの経験を媒介して日本国家につながるという発想が、本論考では後退している。ここではむしろ、横浜ははずずるべったりと日本に重ね合わされている。それはおそらく、氏が横浜歴史の書法に焦点を合わ

¹ 本稿の大筋は、2001年2月2日に東京外国語大学海外事情研究所で開催されたシンポジウムに際しておこなったコメントの録音記録に基づいている。しかし、その後、阿部安成氏が研究所に送付された最終原稿は、報告当日のために用意された原稿とは多少異なっており、録音記録のままでは読者の理解しがたい点があり、修正を加えざるをえなくなった。この機会に、当日は時間の都合上、割愛せざるをえなくなった点などを加筆して出来上がったのが本稿である。なお、阿部氏の論考は記憶の問題にも触れているが、主として歴史の書き方を論じているため、私もこの点に焦点を合わせることにし、記憶の問題には行論の

されている。横浜という都市の歴史を書く際のいわばグラウンド・デザインとして始原の歴史意識が連続して機能しているということは、私も同意しえる。しかし阿部氏は連続性を重視するあまり、この歴史意識というものが顕在化していく歴史的状況、およびその変化というものを軽視しているのではないか。

ところでホイダ氏は報告の中で、1920年代のチェコにおける反カトリック運動の高まりと1990年代のチェコにおける反カトリック運動のそれはトマーシュ・ガリグ・マサリクの思想を媒介項として類似性を有していると述べているが、他方で現在のチェコ政府は反カトリック運動が市民の間で高まることを回避しようと努力し、市民もまたカトリック教会に対して以前よりは寛容な態度をとっていることを指摘している⁴。

これは、チェコにおいて歴史意識というものが単純に持続しているわけではなくて、歴史的状況に応じて一定の変化を被ってきたことを示している。では、横浜歴史の場合はどうなのか。阿部氏は、始原がいくら散開しようと歴史意識

の基本、ないし歴史の書法は変わらないという。そう主張するのであれば、歴史意識というものが変化しにくいということが普遍的にはいえない—それはチェコの事例からも明らかであろう—以上、なぜ横浜＝近現代日本においてはそうした歴史意識が連続しえたのか、その特殊な条件を提示する義務が生じるはずである。

私はむしろ、横浜＝日本においても歴史的諸条件の変化とともに歴史意識が変動してきた側面を軽視すべきではないと考える。たとえば、戦前と戦後では横浜＝日本を取り巻く歴史的状況に大きな違いがある。戦前の日本はアジアに植民地を領有する帝国であり、したがってこの帝国と連動していた横浜歴史の書き方としても「東洋一の」という形容詞が用いられた。しかし、21世紀を迎えた今、「東洋一の」という言葉を日常生活で耳にすることはまずない⁵。

他方で、1980年代以降の横浜歴史の書き方を見たときに、そこでは阿部氏が2節で指摘するように、ネーションあるいは文化というものを前提としてそれらが共存する国際文化都市横浜というような言説が出てきている。これを支える歴史意識は、戦後日本の経済発展を背景とした新たな帝国主義、ないしナショナリズムの台

せているためであろう。阿部氏の記述からは、横浜固有の歴史意識が横浜歴史を生み、それが日本国家の歴史へと上向的に発展ないし接合されたとは読めない。20世紀初頭、一人一人の「私」のほとんどが日清・日露戦争などを経てすでに国民化されており、その後で横浜市民としてのアイデンティティが創出される。その場を提示したのが開港五十年祭であった。日本国家（「ひとびと」の、ではない）の歴史意識がすでに創出されていたからこそ、それをモデルとして横浜歴史が成立したのであり、その書法がナショナルな歴史記述との同型性を示しているのはいわば当然の成り行きであった。

⁴現時点でホイダ氏の完成原稿は手許に届いていないため、チェコの事例についての記述は原則として報告当日に氏が用意されたレジュメと私のメモに依拠している。

⁵阿部氏もまた本論考1節の末尾において「時代を経ていまや、横浜を「東洋一」の港都と呼ぶものはまずいない」と書いている。しかし氏は残念なことに、ここから歴史的状況の変化の考察に向かう代りに、「しかし、「日本一の外航船の入港隻数を誇る」と書くことはいまもやまない」と続け、歴史意識の連続性を強調するのである。

頭という歴史的状況を反映しており、1970年代までの歴史意識とも異なった側面を有しているだろうし、ましてや100年前の始原意識というものが単純再生産され続けた結果とみなしえないのではないか。

次に始原の歴史意識の主体、主語は誰なのかという問いに移ろう。1節の記述から明らかのように、20世紀初頭に創成された起源の歴史意識の主体は基本的に社会のエリートであり、その事実は1930年代まで変わらない。それが横浜市当局であるか市議会議員であるか、あるいは民間の地方新聞社の記者であるかはここでは問題ではない。しかし、横浜に住むひとびとがすべてこういうエリートでなかったことは、阿部氏が別の場所ですでに明らかにしている通りである。しかもこれらの横浜エスタブリッシュメント（これは私の造語である）は特定の住民を市民としてふさわしくない存在として排除することを試みていた⁶。

ここで問われるべきは、阿部氏が歴史意識の主体の階級性という問題を回避している点である。本論考を通じて氏は一貫して、「ひとりひとりの市民」、「ひとびと」、「多くのひとびと」、「広範なひとびと」といった政治・経済・社会的にみてまったく曖昧な用語を多用した結果、誰が歴史意識の主体であり、その主体が誰

に向けてそれを発信しているのかという点をそもそも明らかにしえないという陥穽にはまってしまったのだ。たとえば「それ（開港記念日のこと）をひとびとの「記憶」にどのように定着させるのか・しているのか」といった表現は、「させる」という行為の主体が横浜エスタブリッシュメントであり、その行為の客体が彼らの想定しているところの理想的な「市民」にすぎないにもかかわらず、「している」という言葉と無造作に併置することにより、エスタブリッシュメントの歴史意識と普通に横浜で生活している住民のそれがあたかも一致しているかのような印象を与える。阿部氏の論法にしたがえば、横浜市歌を作詞した森鷗外（彼が横浜市民であったことはないはずだが）と『横浜開港側面史』の編纂過程の中で開港時を想起せよと強制された「七十六翁某」のいずれもが、始原の歴史意識を共有することになってしまうのだ。

たしかに、1節を注意深く読めば、阿部氏が戦前の横浜においてエリートと民衆の歴史意識が簡単に一致したと考えていないことは明らかである。節の結論として「しかし他方でいえば、いくえもの意味がなければ機能しない装置（開港記念日のこと）などほとんど死体ではないか」と書くとき、氏は起源の歴史意識が横浜市民の多くには定着していなかったことを認識している。しかし、それに続けて「もう立ち直れないかのような体を呈している記念日をそれでも生かしてしまうのは、ほかでもない、その

⁶ 阿部安成「横浜開港五十年祭の政治文化—都市祭典と歴史意識—」『歴史学研究』No.699(1997.7), pp.1-18。とくにIII-2を参照。

始まりの日を希求するひとびとの心性である」という一文が挿入されるのを読むと、「ひとびと」とは一体誰のことなのか、私は困惑の淵に突き落とされてしまう⁷。

歴史意識の階級性の問題をひとまず捨象したとしても、始源の歴史意識が阿部氏のいうようにエリートによって創成されたものであるならば、こうした意識を定着させるべく書かれる歴史のテキスト—記念日もまた一つのテキストである—を読み手の側がどう受け取ったのかという問いは残される。1909年7月1日の開港五十年祭というテキストを実際に生きた「ひとびと」について阿部氏は、そのおよそ20年後の1928年に記念日が7月1日から6月2日に変更された際、「記念日の変更に対する反対はほとんどなかった」と記している。これは、開港五十年祭というテキスト、すなわち横浜エスタブリッシュメントによる起源の歴史意識を定着させようとする意図が、「ひとびと」の記憶にか

すりきずひとつ負わせることができなかったことを意味しているのではないか。

ここで二つの疑問が派生する。1930年代の初頭において「ひとびと」の間に定着していなかった起源の歴史意識を連続しているといっけく括してしまっているのか、というのが一つ。これはすでに論じた点と関連している。二つ目は、「ひとびと」はどのように歴史のテキストを読んでいたのか、あるいは読んでいなかったのか、という読み手の問題である。これについては最後に詳しく論じることにするが、ここで指摘しておきたいのは読み手のおかれた歴史的状況を無視することはできないという点である。戦前においてどれだけの「ひとびと」が文字化された横浜歴史にアクセスする条件を有していたのか。高度成長後、歴史の知識がテレビのクイズ番組の材料と化した現代と戦前では、やはり読み手の態度は異なっていると考えられるべきではないか。

三つ目の問いは、横浜歴史の書法に見られる「ナショナルな欲望」ということを阿部氏が問題にされている点に関わる。ナショナルな欲望が横浜歴史の書法的前提であるとするならば、この書法は近代日本の他都市にも自動的に適用されてしまうのか。ナショナル・ヒストリーとローカル・ヒストリーの関係というものを、この横浜と近現代日本の歴史の連動というところでもってとらえて、それだけで済むのであろう

⁷ ここで私が念頭においているのは、カルロ・ギンズブルグが『チーズとうじ虫』の冒頭において展開した、「マンタリテ＝心性」論のもつ階級性に対する批判である。彼は16世紀のイタリアにおける社会文化状況を論じるにあたり、階級的な概念である心性ではなく、あくまで階級概念に根差した民衆文化概念の妥当性を主張する。私は文化を階級＝経済に還元するつもりはない—そんなことはギンズブルグもしていない—けれども、阿部氏の用語の使用法に対してはギンズブルグの批判をそのまま適用すべきだと思う。カルロ・ギンズブルグ『チーズとうじ虫』みすず書房、1984（原著は1976年）。さらにいえば、書き手と読み手の双方につき、エスニシティ、ジェンダー、世代などに基づく差異化も、論点によっては分析対象とする必要があるだろう。事実阿部氏は前掲2論文の中で、開港五十年祭というテキストの書き手—長州閥の元老たち（彼らの井伊直弼銅像除幕式への欠席はそれだけでも一つの発言行為である）と大隈重信、旧彦根藩士ら—の間で、その政治的立場の相違のゆえにテキストに込めようとする意図が複数存在し、不協和音が生じたことを指摘しているのである。なぜ氏は、書き手と読み手の間の不協和音には耳を傾けようとはしないのか。

か⁸。

チェコの場合を考えてみよう。チェコは、最初は共和制下、次は社会主義体制下、間にナチスによる占領とスロヴァキアの衛星国家化をほさみ、20世紀の大半をチェコスロヴァキアという国民国家の一部として経験した。社会主義体制下にはイデオロギー的統合が強力に推進され、そのために歴史も動員される。たとえば、ホイダ氏によれば、チェコスロヴァキアの一部地域は旧ソ連軍によってではなく米軍によってナチスから解放されたのだが、その事実は長い間公式のチェコスロヴァキア史の中では隠蔽されていた。ところが、このように政治体制を正当化する歴史意識を様々な回路を通じて国民に定着させる努力が40年以上続けられたにもかかわらず、共産党独裁崩壊後わずか数年で国民国家チェコスロヴァキアの歴史意識は溶解し、チェコとスロヴァキアの個別の歴史、さらにはヨーロッパの歴史へと「ひとびと」は回帰してしまったのだ。

これは、チェコスロヴァキアという国民国家の歴史とその構成部分であるチェコとスロヴァキアの歴史とが、70年余にわたる共有された経験にもかかわらず、意識の面では共振していないことを浮き彫りにしている。そういう事

例が同じ時期にあった以上、横浜歴史が日本の国民国家の歴史の語りの中から逃れることができなかったのかはなぜなのか、日本の中の他都市は横浜と同質の歴史的状況をどこまで共有してきたのかを、解明しなければならない。そして、横浜＝日本の図式が日本全国にあてはまることが明らかにされるとしたら、次の段階ではそのような状況を可能にした近代日本の国民国家の質というものを比較史的観点から検討することが要請されるだろう。

最後に残されているのは歴史をどう書くべきなのかという、私のような「実証史家」には手に余るほど難しい問題である。これを論じるにあたり、上で予告しておいたように、歴史を読むという行為のはらむ問題を補助線として導入しようと思う。

阿部氏が本論考を通して一貫してこだわっているのは、歴史の書き方である。氏にとって最も重要な論点は、いかにしてナショナル・ヒストリーに回収されないかたちで歴史を書くことができるかであり、それに対する回答として一方で書き手の数をどこまでも増やすことを提案するとともに、他方で専門職としての歴史家はナショナル・ヒストリーに回収されてしまう「はじめ」の物語や「ひとつながり」の物語を批評することを責務とすべきであると述べ、結びとされている。

この阿部氏の語り口は私には、書くという行為を特権化しているように聞こえてならない。

⁸ 梅森氏は前掲論文において大阪の事例を引きながら、そしてまた井野瀬久美恵氏は神戸と横浜を比較しながら、いずれも阿部氏の立論を一般化することに対する異議を申し立てている。井野瀬久美恵「忘却の記憶を成立させる―「かたち」の選択とその多様化をめぐる」阿部安成他編『記憶のかたち』、第5章。

これでは読み手が歴史のテキストをどう読み解くのかという問いは最初から排除されてしまう。しかし、読まれない歴史についてその新たな書き方＝書法を次々と編み出したところで、一体いかなる意味があるのか。あるいは読まれ方が書き手の意図にしたがって一方通行的に規定されているとすれば、そもそも批評の成立する余地はないし、書き手の歴史意識イコール「ひとびと」の歴史意識という等式から逃れることも不可能なのだ⁹。

読み手の戦術の重要性を正面から論じた歴史家としてはミシェル・ド・セルトーの名が挙げられる。セルトーによれば、国家や社会のエリート層の間で書物を通じて民衆を教化すべきであるというイデオロギーが一般化したのは18世紀啓蒙の流れにおいてであった¹⁰。20世紀初頭の時点で横浜のエリートや日本国家の指導者層がこのイデオロギーを共有するにおよんでいた可能性はきわめて高い。『横浜開港五十年史』や『横浜開港側面史』の編纂あるいは開港

五十年祭の開催が、書物を通じての教化というイデオロギーを抜きにして発想されたとは、阿部氏の記述にしたがうかぎり、考え難い。

起源の歴史意識や書法に対する氏のこだわりが、横浜＝日本におけるこのイデオロギーの発現形態の解明という作業に資することは確かである。しかし、すでに指摘しておいたように、読み手が書き手の意図を100パーセント忠実に読み取り、それにしたがって教化される保証はどこにもない。20世紀前半の横浜の住民の間に始源の歴史意識が容易に定着しなかったことは阿部氏が明らかにしている通りである。現代に聞いていると、「横浜もののはじめ」の類書の読者は知らず知らずの内にこの歴史意識を注入されてしまっているといわれても、私には承服しがたい。マスメディアを通じて伝播される情報もまた一つの書物といえるが、視聴者＝読み手の歴史意識をこれらの情報にのみ基づいて再構成することは可能なのか。私はセルトーとともに、書かれた歴史を信じない、少なくとも疑う自由を読み手はもっていると信じる。その自由の余地が歴史的状況の中で変動することは確かであるとしても。

⁹ 阿部氏が読み手の問題をまったく無視しているなどと私は主張しているのではない。しかし氏が読み手に言及されるとき、彼／彼女を受動的な存在とみなすとともに、その読み方については氏の推測を述べるにとどまっている。「多くの市民にとって…感じられる可能性は拡大する」、「多くのひとが興味を寄せるだろうが」、「読者は5万年前の横浜の始源へと誘拐される」、「少なくとも読者の神経を逆なですることはいっただれのことなのだろうか」と問うとき、また3節で「これはいっただれの耳に心地よく聞こえる横浜歴史なのだろうか」と問うとき、阿部氏は読み手の問題にアプローチするための入り口に立っているかのように見える。しかし結局、これは氏独特のレトリックに終わってしまっている。

¹⁰ ミシェル・ド・セルトー『日常実践のポイエティック』国文社、1987年（原著は1980年）、とくに第12章を参照。

これはまた、日本の歴史研究者の間で一時期話題となった『チーズとうじ虫』の導入部において、カルロ・ギンズブルグが提起した問題にも通じている。彼がロベール・マンドルーを批判する中で指摘しているように、民衆のために書かれた「青表紙本」から民衆の読み方＝文化を知ることはできない。メノッキオの論理もまた、彼の読んだテキストからのみ再構成することとはできない。なぜならメノッキオの読み方は書き手の意図から常に逸脱していくから。

こうした観点に立つとき、歴史の書き手の数を増やすという阿部氏の発想に対しては、われわれ一人一人が歴史を書き残すことが抵抗の拠点となりえるのか、そもそも歴史を書くという行為のもつ教化のイデオロギーからの解放につながりえるのか、という根源的な問い直しが可能となる。歴史をあえて読まない、あるいは書き手の意図から自由に読むという選択肢が、知的にも社会的にも何も生み出さない危険はある。しかし、内田義彦¹¹の言うような意味での読むという行為にはらまれる自由、すなわち書き手の意図を徹底的に理解した上で、それを起点として読み手が自らの経験に照らしながら思考する中で書き手の意図からずれていく自由が確立されるならば、氾濫する情報の発信者に一方通行的にだまされない読み手が生まれてくるのではないか。そして、まずそういう読み手でなけ

れば、ただ書き手の数を増やすことは阿部氏のいうところの書法の数を増やすことにはつながらない、と私は考える。

いま仮に始源の歴史意識の貫徹という阿部氏の図式が正しいとしよう。この図式は読み手というものをまったく受動的な存在としてのみ描きだす。たとえば『横浜もののはじめ考』の著者は、横浜歴史の始源の書法を忠実に再現するにすぎない、私のことばでいえば読み手としての自由をまったく備えていない存在として、阿部氏の苛烈な批判を浴びせかけられる。彼のみならず横浜市民一人一人が始源の歴史意識の虜となっているのだから、これも当然の結果である。では、こうした状況において書き手の数を単に増やしたとしよう。その結果増殖する〈わたし史〉は横浜歴史の書法を不断に拡大再生産して終わるはずである。

これが阿部氏の図式から必然的に派生する単一の書法の再生産メカニズムである。氏はここからの脱出方法として批評という、歴史家に残された特権的な地平を拓こうとされるわけだが、読み手の自由の問題を真剣に考えるならばこうした特権に飛びつく必要もない。そもそも、受動的な読み手の時代と空間を越えた遍在を措定しなければ、この図式は成り立たないのだ。そして私は、この措定は検証に絶えうるものではないと思う¹²。

¹¹ 内田義彦『読書と社会科学』岩波新書、1985年。

¹² 読み手としての阿部氏の存在自体が、氏の意図に反してではあるが、この図式の崩壊を予告している。ここで問われるべきは、

では、阿部氏の提起された批評という方法はどこまで有効なのであろうか。読者は、氏の唱える批評家としての歴史家と私のいうところの自由な読み手の間には共通する点があるのではないか、と思われるかもしれない。しかし、本当にそうなのか。

シンポジウム当日、ホイダ氏は、記念碑そのものを実に目立たないかたちで建設した事例に言及された。これは、記念碑という歴史の書き手が書くことの意味そのものを疑い、一方通行的に意図を読み手に強制することをためらった結果であろうと、ホイダ氏は解釈されている。しかも、そのあまり多くを語ろうとしない、いいかれば読み手の多様な解釈を可能にする記念碑に対してすら、ある風刺漫画の作者は吹き出しというかたちで批判を加え、記念するという行為そのものを無意味化しようと試みた。あるいは、社会主義時代の記念碑に対する改ざん行為。

これらの事例は、歴史を書くという行為のもつ教化イデオロギー的側面から逸脱しながらなおかつ歴史を書き続けるための一つの書法を示している。しかし、それに安易に飛びつくことは許されない。この書法は簡単に借用できるものではないのだ。ここで留意すべきは、それが主体的な読み手の存在を前提としていると同時

に、主体的な読み方を実践する（阿部氏のいう意味での批評と置き換えることができよう）だけでは十分ではないという点である。

阿部氏の本論考が私にとって示唆に富んだものであるのは、この困難を自らに向けられた刃として突きつけてくれるからである。阿部氏がここでいう主体的な読み手であることは明白である。始原の歴史意識の定着を意図して祝われた開港記念日の意味が、五十年祭の翌年にはこのテキストの共同執筆者であったはずの地元紙の記者によってずらされてしまったことを読み取る目。開港＝開国を称揚するために編纂された『横浜開港側面史』に記録された、開港後かつての横浜が破壊されていったことを嘆きを含めて想起した古老の声を聞き逃さない耳。さらには「二百年前の横浜」という項目の下に記録された家と土地の歴史が、『側面史』の基幹に据えられたはずの始原の歴史意識の虚偽性を浮かび上がらせるのだと阿部氏が論じるのを読むとき、私は氏の読み手としての鋭敏さに感服させられる。この鋭敏さは、19世紀アルゼンチンの歴史家サルミエントの歴史叙述がテキスト内部に民衆の声を組み込んだことによって書き手の意図を逸脱していくメカニズムを指摘した林みどり氏のそれと同質であると思う¹³。

自由・非自由という二分法ではなく、読み手の自由の質ないし在り方というものが歴史的にみていかなる条件によって規定されているのかということなのだ。

¹³林みどり「歴史叙述と〈法外なもの〉の在り処—19世紀アルゼンチン思想における自己領有の問題—」『思想』No.851(1995.5)、pp.45-65。

にもかかわらず、阿部氏は林氏とは正反対の方向へと向かう。「ひとびと」の想起や声が歴史のテキストを多義的にしていく可能性を追究しないのだ。開港のころを想起せよと強制された「ひとびと」の声を収録したはずの『側面史』の中に氏は、「開港のころの出来事が、「横浜市民」として、あるいは「日本国」にかかわる出来事として体験されてしまう事態」を読み取ることで、歴史の書き手の意図、いいかえれば始源の歴史意識の貫徹というア・プリオリな図式に舞い戻る。読み手としての能力の高さは、歴史を書くという行為に内包される教化イデオロギーを自覚しないとき、換言すれば書くという行為の特権化の誘惑から逃れられないとき、読むという行為にひそむ自由を抑圧する装置へと変換されるのだ。阿部氏の批評はこうして、ナショナルな物語を否定するかのように見えながら、実はひそかにその変奏曲—裏返し—のナショナル・ヒストリーとでも呼べるであろう—を奏でることになる。

阿部氏もまた陥ってしまったこの隘路からは、書き手を増やすことや読み手＝批評家としての能力をとぎすますことだけでは脱け出せない。今の私には、特定の歴史的状況の中で自分の置かれた位置、自分の価値判断にどこまでも自覚的であり続けることで読み手としての自由を確保すると同時に、同等の自由を最大限行使しようとする読み手とときに対話、ときに格闘しながら書くという営為の中でのみ、私

にとっての新たな書法が生まれる可能性があるのだと信じるほかはない¹⁴。

(やすむら なおき・東京外国語大学)

¹⁴ 私自身は、文化人類学経由で文化について語る権利の問題などに関心をもつようになり、歴史叙述においても書く者と書かれる者の関係、発話の位置などにもっと敏感な書き方があるべきではないかと考えはじめていた。しかし、自ら歴史叙述の在り方という方法論に踏み込んで議論する勇氣はもっていなかったと告白せざるをえない。その意味で、この領域にあえて挑戦された阿部氏の勇氣は賞賛に値すると思う。本稿における氏の立論に対する批判は、氏の試みに対する私の評価の高さを前提としているのである。にもかかわらず、ナショナルな欲望の遍在が始源の書法の再生産を保証するという図式に私が違和感を感じざるをえないのは、ナショナルな歴史意識が国民の間で広く共有されてきたとはとてもいえないメキシコの植民地時代史と現代のエスニック運動を研究対象としているせいかもしれない。メキシコの経験に即してみれば、この欲望が遍在せずとも国家エリートによって始源の書法は創出されえたのである。したがって、たとえばノーベル文学賞を受賞した作家オクタビオ・パスとメキシコ・シティーの町角で路上生活を余儀なくされている子供たちの間で歴史意識が共有されていると措定する必要は、私にはない。阿部氏の始源の書法に対するいらだちは、やはり近現代日本の歴史的状況に規定されているのだ。氏の批判が、安易に地方の自立を叫び、地方の歴史の独自性を主張する「ひとびと」がナショナルな歴史の書法の縮小コピーを増殖させて終わる危険に対してのみ向けられ、歴史意識の問題が切り離されていれば、氏の議論はもっとずっと整合的なものとなっていたのではないかと。私がこのような見地を獲得するにいたった経緯の一端については、以下の拙稿を参照していただきたい。「周縁における「アイデンティティの政治学」：メキシコ・ブレベチャをめぐる言説のせめぎあい」『ポストコロニアル状況における地域研究2』東京外国語大学海外事情研究所、1998年、pp.1-28；「クリオーリョ・啓蒙・ナショナリズム—スペイン帝国における言説のせめぎあい—」近藤和彦編『岩波講座世界歴史16 主権国家と啓蒙』岩波書店、1999年、pp.123-143；「帝国における「中心」と「周縁」—十八世紀メキシコにおける地域社会とスペイン帝国の再編—」濱下武志・川北稔編『地域の世界史11 支配の地域史』山川出版社、2000年、pp.134-175。